魔女の毒薬

じゅう・かわせみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女の毒薬

【Ｎコード】
Ｎ４１５７Ｆ

【作者名】
じゅう・かわせみ

【あらすじ】
病弱な少女、静香は入退院を繰り返す生活で、兄の竜一に対しいつも負い目を感じていた。そんな彼女の見舞いに来たクラスメートの律子は自分のことを魔術師だと言う。静香は律子にある頼みごとをする。

静香にとって、目覚めの気分はとても大切な関心事であった。
病気がちな彼女は、寝ている間に体調が変化することが少なくなく、ベッドで寝ているときには不安と期待がいつも胸の中を巡っている。
だから寝る前のお祈りは欠かさない。
明日は気持ちよく目覚められますように、と。

瞼を開けた静香が最初に目にしたものは、見慣れた天井の模様だった。彼女は小さくため息をつく。薄いグリーンの地にクリーム色の幾何学模様は見慣れたものだが、ここは彼女の寝室ではなく、病院の一室だったからである。

――わたし、また病院に運ばれたんだ。

静香は幼い頃から身体が弱く、しばしば体調を崩してはそのまま入院するという生活を続けてきた。これまでの人生のうち、病院で過ごした時間とそれ以外の時間ではどちらが長いのか分からない程である。
学校で親しい友達を作ることもなかなか出来ない、外で身体を動かして遊ぶこともできない。かけがえのない大切な時間を、回復のためだけに割り当てなければならないことが悔しかった。自分は普通の人に比べて生きていることを楽しむ時間がはるかに少ないのだ、と思うと静香はとても悲しくなる。

――どうしてこんな身体に生まれてきてしまったんだろう。

そんな彼女の安らぎは、兄の竜一の存在だった。静香が体調を崩すたび彼女の面倒を看るのは専ら竜一の役目であった。静香の母は、静香同様に身体が弱い女性で看病どころではなく一年前に他界しており、また静香の父は個人事務所を開く税理士で、なかなか病床の静香に構ってやれる時間がとれない立場であった。竜一は静香と正反対に健康な肉体に恵まれていたので、静香が生まれた時からずっと肉体面でも精神面でも彼女をサポートしていた。自分の居場所がほとんど自宅と病院のどちらかという、狭くて閉じた世界の住人である静香が、そんな竜一に兄妹愛を越えた恋慕の情を抱くようになったのは必然だったと言える。

左腕に違和感を覚え首を左側に捻ってみると、点滴の針が打たれているのが見えた。

そして意識がはっきりしてくるに従って、静香の頭をずきずきとした痛みが苛み、彼女は顔を顰めた。せっかく病院に来ているのだから寝ている間に苦しみが終わっていてほしかったのだが、そう上手くはいかなかったようだ。

反対側を見ると、学校の制服姿の一人の少女が椅子に腰掛け黒いハードカバーの表紙の本を読んでいた。学生鞄が椅子にもたれかかっている。

静香の視線に気づくと、彼女は目を上げて本を閉じ、淡く微笑んだ。

「やあ、静香くん。目が覚めたんだね。気分はどうだい？」

「伊部さん」

静香のクラスメートの伊部律子だった。長いストレートヘアと黒目勝ちの吊り目を持つ美人で、男子ならずともその美しさには目を見張る。

静香が律子と初めて出会ったのは、入院中の自分を見舞いに来てくれたときだった。彼女は転校生なのだそうだが、入院中で転校初

日から一度も顔を見ていない静香が気になって一度は挨拶したいとやってきたのだと言う。
その日は、他愛無い話をして過ごしたが、それからというもの、律子はちょくちょく彼女の見舞いに来るようになった。そればかりか、いろいろと身の回りの世話もしてくれるようになっていた。
律子が、何故そんなに自分に構ってくれるのか静香は解らなかった。否、心当たりが全く無いわけではないが……。

見れば、律子の持つ本の表紙に描かれた文字は見慣れない、英語のアルファベットとは異なるものだった。
「伊部さん、その本って、もしかして魔術の」
「まあね」
伊部律子は、自らを魔術師だ、と嘯く奇妙な女の子だった。しかし、もしかしたら本当なのかもしれないと思うぐらい、彼女は神秘的な雰囲気を纏っていた。
実際、静香は以前に一度、律子と共に不思議な体験をすることになる。見舞いの花を刺しておく花瓶をうっかり割ってしまったとき、そこに居合わせた律子が怪しげな言葉を発し、手を翳すと花瓶の欠片がひとりでに動き、割れる前の状態に戻ったのだ。それは手品とは思えない術であった。
「ボクは魔術師なんだよ」
その日から、律子とのおしゃべりの話題に魔術というジャンルが加わることになった。未知の世界の知識に、彼女は胸が躍った。

静香は点滴針に注意しつつ半身を起こす。気休め程度ではあるが、少しでも身体を動かしたほうが気がまぎれて頭痛を和らげられることを彼女は経験で知っていた。
律子はベッドの脇の台の上にあった静香の眼鏡をとって彼女に掛けさせる。
「ありがとう」

「大丈夫かい？　どこか苦しいところとか痛いところはないかい？」
「……兄さんは？」
　静香は律子の問いには答えず尋ね返した。静香は、食事を終えて顔を洗いに行こうとした途端に立ちくらみがしてそのまま気を失ったことを思い出した。倒れる直前、竜一に抱きかかえてもらったことはうっすらと覚えているがそれ以降の記憶はない。
今朝まで自宅で療養していたが、また入院になるかもしれない、と思った。
「仕事に行っているよ。静香くんをここに連れてきてからしばらく様子を見た後、ボクに後を任せて仕事に行った」
「そう、なんだ……」
　静香の胸がキュッと締まったような気がした。それは自分でも認めたくない負の感情だった。
　物心つく前から苦しい時にはいつもそばにいてくれた兄の竜一。けれど最近、律子が見舞いに来るようになってからは、竜一はその時間を律子と分担するようになった。当然その分竜一とふたりきりになる時間が減ることになる。
　我儘な感情だとは思う。学生時代を終え、就職した竜一はそうそう簡単に静香のために時間をとれないことは解っている。決して竜一の愛情が減ったわけではないのだろう。けれど頭では理解していても心では納得できていないのだった。
　もう一つ静香の胸をざわつかせている理由は、律子が女の自分の視点から見ても非常に美しい容姿をしていることだった。クラスメートとして見舞いにやってきているとは言え、その回数は多すぎると静香は思う。そしてその理由を、彼女は嫌でも邪推してしまう。律子と竜一が自分の目の届く場所で親しげに会話する様子を見ていると、昏（くら）い感情に襲われてしまう。静香はそんな自分が嫌だった。
　――伊部さん、ごめんね。決して伊部さんのことが嫌いなわけではないの。

静香が罪悪感を覚えると、せっかく弱まっていた頭痛がぶり返してしまう。軽い吐き気を覚え、開いている方の手で口元を押さえた。
「静香くん。苦しいかい？」
律子が静香の身体に寄り添い背中をさする。その優しさがますます胸に痛くて静香のデリケートな身体は脆く反応してしまう。静香は小さくうめいたかと思うと、胃の中のものを戻してしまった。
「静香くん！」
律子は自分のハンカチを取り出し静香に手渡すと、すぐにナースコールのボタンを押した。
「横になった方がいい」
律子に支えられながら静香はベッドに横たわる。申し訳なくて、情けなくて、悲しくて、静香の目からぼろぼろと涙が零れた。

――ねえ、伊部さん、魔法を使えばこの前みたいに花瓶を直せるのだったら……。

背中を丸めながらベッドに横になり、いつしか律子に質問したことを思い出す。
「わたしのこの貧弱な身体を、魔法で治すことはできないの？」
静香はほんの軽い気持ちで言ったことだった。だが、律子は眉をしかめ、口を閉ざしてしまった。
「伊部さん？」
「……力になれなくてすまない。ボクは魔術師として未熟だし、そもそもボクの扱っている魔術は、病気を治す類のものは不得意分野なんだ」
「えっ？」
静香は魔術と聞いて、手を患部にかざして呪文を唱えるイメージを思い浮かべていたので、律子も何かおまじないをしてくれるものだと思っていた。しかし彼女はそれを否定した。

「魔法の起源の一説に、悪魔が人間に教えたものだというのがある。静香くんはミルトンの『失楽園』を読んだことがあるかい？」
「うん。堕天使ルシファーが他の堕天使たちを率いて、神と天使たちに戦いを挑んだ果てに敗北して地獄の底に落とされるというお話でしょ？」
　話の流れがどういう方向に向かうのかわからなかったが、読書が共通の趣味らしいと分かった静香は律子に合わせて会話を続けた。
「そう。そしてルシファーは神への復讐を目論んだが、武力では適わないと身をもって知ったので、楽園に住む人間にターゲットを定めたんだ。人間は脆弱でありながら神の寵愛を受けている、ルシファーにとっては等しく憎い存在だったからね」
「有名な話だね。悪魔は蛇に変身して楽園の人間の女性を誘惑し、楽園の中心部にある禁断の木の実を食べよとそそのかした」
「まんまとルシファー、否、サタンの計略は成功し、女は男も誘って神から禁じられていた木の実を食べ、神の怒りに触れて楽園から追放された」
「それが『失楽園』というタイトルになっているのですものね」
「そう、その後もサタンの復讐心は衰えることを知らず、人間の欲につけこんでは神に叛かせるように誘惑を続けているんだ。それが魔術なんだよ」
「と、いうと……？」
「魔術というのは、物理学的には不可能なことを起こす方法、すなわちこの世の秩序を破壊するための方法なんだ。神はこの世界の秩序を保とうとする立場だから、それを人間たちに破らせるというのはサタンにしてみればこの上ない復讐なんだよ。人間が自分の病気を治す、というのはすなわち自分という存在の秩序を回復するということに他ならない。だから直接怪我や病気を治す魔術は存在しないんだ。勿論、頭を使えば、その治癒の補助になるように魔術を応用させることは出来るけどね。でも、ボクは未熟者だから静香くんの役には立てそうにないよ」

視線を落とす律子に、静香は慌ててパタパタと手を振った。
「そんな、謝らないで。伊部さん。伊部さんを責めるつもりで言ったんじゃないの。こっちこそごめんね」

その日の面会時間終了間際、に竜一は仕事先から静香の病院へ駆けつけてきた。
昼間の様子を律子から聞いて心配していたが、出迎えた静香の笑顔を見てほっと胸を撫で下ろす。
「その調子ならすぐ退院できそうだな。早く元気になるんだぞ。静香」
「うん、ありがとう。兄さん。また明日ね」
「ああ。伊部さんも今日はご苦労様。送っていくよ」
「ありがとうございます。静香さんの着替えとか整理したいので、ちょっと先に行って待っていてくれますか」
「わかった」
竜一の姿が病室から消えると、静香の表情が変わった。ほころんでいた口元が閉じられ目からは輝きが消える。
「伊部さん」
静香の衣類をバッグに詰め込んでいる律子に声をかける。その声から緊張を感じ取った律子は何事かと振り向いて静香の目を見つめた。静香はつい先程までとはうってかわった様子で苦しみの表情を隠そうとはしていなかった。
「静香くん、どこか苦しいのかい？」
「ううん。苦しいと言えば苦しいけど、いつものことだから。それより伊部さんに大切なお話があるの」
「何だい？」
律子は手を止め、しっかりと向き直る。
「ねえ。伊部さんは前に『魔法で病気を治すことはできない』って言ってたよね？」
「ん？　そう言えばそんな話もしたね。それがどうかしたのかい？」

静香の真意を測りかねた律子が問い返す。まさか静香は、律子が無力だという嫌味を言いたいわけでもあるまい。
「だったら、その逆のことは出来るということだよね？」
「……どういう意味かな」
律子の片方の眉が吊り上る。
「伊部さんに……わたくしの苦しみを終わらせて欲しいの。永遠に。伊部さんの力を使えばできることなのでしょう？」
恐ろしいほど真剣な静香のまなざしを自らの瞳に受けた律子は、一瞬驚いた表情を見せたが、気圧されぬようにとばかりに静香を見つめ返した。
「驚いたな。さっきまでお兄さんの前で見せていた笑顔は演技だったのか」
「もしさっきわたしが苦しそうな顔をしていれば、明日は仕事を休んだかも知れない」
「それだけ心配されているがわかっているのなら、何故、安易な選択をする？　静香くんは自分を心配してくれる人の気持ちが解らないような人間ではないだろう」
律子が初めて見舞いに来てから、まだ日は浅い。だから彼女が静香の人格について語るのもおかしな話ではある。でも、静香は違和感を覚えなかった。
「解るからこそ、つらいことだってあるよ。わたしは生まれつきこんな身体で、薬の力だってその場しのぎでしかない。このままだと、一生お兄ちゃんに迷惑を掛け続けていくことになるよね」
「それは静香くんが悪いわけではないし、お兄さんだってそれを迷惑とは思わないはずだ」
「思わないだけで、実際に迷惑を掛けているのは事実でしょ」
律子から目を逸らし、窓の外を見つめる静香。どんよりとした雲が、浮かんでいた。
「本当なら、兄さんはもっと素晴らしい人生を歩んでいく筈だったんだよ。でも、わたしの面倒をみるためだけに学校も会社も自宅か

ら通える範囲のところで妥協してしまったの」
「静香くん。それは誇るべきことだよ」
律子の言葉にも、静香は眉根を寄せて苦笑し、左右に首を振る。
「それだけじゃないの。励ましの言葉をかけられて淡い夢をみて、そしてそれが決して適えられるものではないことに気づくと胸が潰れそうに痛いの。でも純粋に兄さんの思いやりから出た言葉だから拒絶することもできなくて」
「静香くんにとって、お兄さんの言葉は自分の言葉より大切なんだね」
「……そうかもしれない」
うつむく頬に差し込む赤みを、律子は見つめていた。
「終わらない自分の身体の苦しみに加えて、兄さんの愛情に応えてやれない苦しみ。わたしが抱えるにはしんどすぎるみたい。だから、」
「待て」
無意識のうちに、律子は静香の手を握った。
「今まで静香くんが言ってきたことは自分のことだけだろう。残される者の苦しみはどうなる？　お兄さんの悲しみを少しでも想像できないのか？　静香くんがお兄さんに対してどんな感情を持っているかは察しているつもりだよ」
恋慕の情を。
「ん。悲しむだろうね。でも今なら……兄さんの傍には、伊部さんがいるし」
静香は皮肉めいた微笑を見せ、律子は怯えたように目を見開いた。律子がこのような表情をすることなど滅多にない。
「わたし、知ってるよ。そこの窓から見下ろせば、仲良さそうに並んで病院にやってくる伊部さんと兄さんが見えることがあるんだ。きっと伊部さんと出会えたのは運命だったんだと思う。兄さんは小さな悲しみと引き換えに長い苦しみを終わらせて、新しい道を歩み出すことができるんだよね」

「し――」
と、その時、病室のドアが滑り看護士が顔を覗かせて面会時間の終了を告げた。幸か不幸かそのおかげで律子は静香に対してきつい言葉を投げつけずに済んだ。
「今の話の続きは明日にしよう。静香くんの気持ちはよくわかったから」
くるりと静香に背を向けて律子は足早に病室を出た。固く拳を握り締め唇を噛んで激情を抑えるのに必死だった。
――信じられない。本当にあれで……ではないのか？

次の日になってもしばらく静香の病室を訪ねる者は無く、律子がやってきたのは夕陽の光が室内を薄いオレンジ色に染める頃だった。
「伊部さん」
「ほら、お望みのものだよ」
「あっ……」
律子は半透明の茶色のガラスの小瓶を取り出し、花瓶の置いてある棚の上に乗せた。
「この瓶の中身を飲んで眠れば、全ての苦しみは消え、安らかに永遠の世界へ旅立てるよ。ここに置いておくから、決心がついたなら飲みたまえ。やっぱり死ぬのが怖くなったのなら手をつけずにそのまま置いておけばいい。それじゃ」
それだけ言うと律子は静香の呼びかけも聞かず再び病室を出て行った。
静香はベッドから下りると窓から病院の正面入り口付近を見下ろした。しばらく同じ場所を見つめ続けていたが去っていく律子の姿を見つけることはなかった。別の出口から出て行ったのかも知れない。

近くの小さな公園で子供たちが歓声をあげながらボール遊びをしているのが見えた。
その姿がとても愛らしくて、幸せそうで、羨ましくて、切なくて。
――今なら、ためらうことなく逝けそう。
静香は肚を決め、小瓶を手に取った。
中の液体は、ほんのりと甘い匂いと味がした。
目を閉じると、ゆっくりと意識が深い闇へと下りていくのを感じた。

静香はドロドロとした粘性のある空気の中でたゆたう。その場所は真っ暗闇で重力がどちらの方向に働いているのかすらわからない。上も下もわからぬまま、彼女は自分をとりまく重みのある空気に全身を圧迫され、ただ息をするのも苦しい。
不意に網膜に刺激を受けて静香は瞬きした。暗黒の世界の中、視界の端に光が生まれた。
静香は本能的に光を求めた。光が正面に見えるように身体をゆるゆると回転させた。
あそこへ行けば楽になれる。静香は空気の中をもがくようにそちらへ向かった。だんだんと目の前が明るくなり、そして、光がはじけた。

そこは見慣れた静香の家の仏間だった。
それを前にして竜一と律子が手を合わせている。
――これは。
静香は直感的に二人が手を合わせているのが仏となった自分であると解った。

不意に竜一の身体が震え、彼はその場に泣き崩れた。その背中を律子が優しくさする。
顔を上げた竜一の頬に手を添え、悲しげに首を横に振る。
竜一は大きく頷くと涙を拭った。
二人は立ち上がって仏間を出て行こうとする。
と、竜一の腕が伸び、彼女の身体を背中側から抱きしめた。

――えっ？

律子はその腕を振り解こうとして……その行為を中断した。

――ええっ？

竜一の腕に自らの腕を絡ませ、愛しげに頬擦りする。

――やめて。

律子は身体を回して竜一と向き合い、改めて二人は抱きしめあった。

――そんなことしないで。離れて！

その抱擁のさなか、二人の視線が合う。そしてお互いの唇を合わせようと顔を近づけた。

――嫌っ！

すると。律子が。
見えないはずの静香の方に顔を向けてニヤリと口を開いた。
『だって、これがキミの望んだことなのだよ』

静香は声にならぬ悲鳴を上げた。そして。

彼女は「ベッドから跳ね起きた」。

目覚めの気分は最悪だった。呼吸は荒く心臓は早鐘を打つようにバクバクと脈打ち、首筋には汗が纏わりついて気持ちが悪い。

「夢……？」

静香がつぶやくと。

「『夢で良かった』と思っただろう？」

暗闇から声を掛けられ、静香は、キャッ、と悲鳴を上げて身を固くした。

「静かに。今は面会時間じゃないから、私がここにいることを知られるのはまずい」

「伊部さん……？」

「ああ」

次第に目が慣れてくると部屋は真っ暗ではなかった。ぼんやりと律子の姿がカーテンごしの朝日を浴びて浮かんでいた。

「わたし……生きてる？」

生きていなければこんな言葉を言うこともできない。静香は自分の身体に触れてその形を確かめる。

「ああ、生きてるよ」

「え、どうして、じゃあ、あの瓶の中身は」

「どんな夢を見たのかな」

「それは……」

口篭もる静香を見て、律子はフッと笑った。

「瓶の中身は致死性の毒なんかじゃないんだよ。その薬は精神に作用して、飲んだ本人が一番恐れていることを悪夢として見せる呪いが掛けられている。本来は憎い相手を呪うための薬なんだ」

「悪夢」

「おおかた、お兄さんに関係する夢を見たんだろう」

「……」
律子を前にして言える内容ではないが、沈黙したことは肯定したのと同義だった。
「人と人とが愛し合う、というのは生物学的には単なる種族存続の本能から来るものでしかない、というとロマンが台無しだけれど」
「……」
「つまり、恋愛というのは人の生きようとする力そのものなんだ、ってことは分かるだろう？」
「生きようとする力」
「何かを食べたいとか、楽をしたいとか、恋をしたい、という本能から生まれた欲求に人間は決して逆らうことはできないんだよ。静香くんは自分の身体を蝕む病から逃れて楽になりたいと思った。でもね、死は苦しみからの解放ではないんだ。苦しみから逃れて楽になったことを感じられるのは、生きているから出来ることじゃないか」
「……ん」
小さく頷く静香を見ながら息を呑み込むと律子はぐっ、と静香と顔を近づけて言った。
「死ぬのは、その薬を飲んでも、悪夢も見ないくらい世界に絶望してからでいい。静香くんがお兄さんに対して恋をしている間は、生きろ、と自分が自分に命令しているってことさ」
「それを教えるためにわたしにあの薬を？　……あっ」
律子はごまかすように、ちゅ、と静香の頬に接吻をすると立ち上がった。
「さて、私は見回りの看護士さんに見つからないうちに退散するとするよ」
律子はカーテンを開け、心地よい日光を部屋に採り入れた。芝居じみた、ひらひらと手を振る動作をしながら病室を去っていく。
――ありがとう、伊部さん。

外から聞こえるスズメの鳴き声が心地よかった。

「伊部さん、この度は本当にありがとうございました」
竜一は用紙に必要事項を書き込むと向かいに座る律子にそれを手渡した。
「いいえ、ボク……失礼、私も貴重な経験をさせてもらいました」
律子は受け取った魔術師協会の印の入った用紙を確認すると、それをファイルに挟んで鞄にしまった。
「一部魔術の力を借りているとは言え、あんなにも人間にそっくりな人造人間（ホムンクルス）を見たのは初めてです。石須様は余程優れた錬金術師だったのでしょうね」
律子は竜一の母の旧姓を挙げて、その名を称える。
静香の身体から感じる魔術の痕跡がなければ、彼女が人間ではないなど、悪い冗談としか思えなかっただろう。それほど素晴らしいわざであった。律子の胸の中で、感情表現豊かな静香の表情が幾つも浮かんだ。きゅっ、と心臓が熱くなった。
「素晴らしいと言われても、俺は全く錬金術を学んだことはないので、よくわかりません」
尤も、錬金術では足りない部分を補完した魔術は不慣れなためか不完全なものであり、その副作用で生まれた歪みを正すために律子が派遣されてきたのである。
「静香はもう、大丈夫なのですね？」
竜一の問いに、律子は申し訳なさそうに首を傾げる。
「静香さんの中で、これまで魔術によって生まれた歪みは差し当たって矯正しました。しばらくは人間として健康に生きられるでしょう。しかし、魔術の実行を停止した訳ではありません。今、こうしている間にも、また少しずつ歪みを蓄積しています」
「では、またいつか静香は同じことになってしまうのですか？　そ

の……魔術を、歪みを生まないものにすることは」
「残念ながら、あの魔術は、石須様の独自の錬金術と密接に結びついているため、私が下手に手を加えるわけにはいきません。そんなことをすると、静香さんを彼女たらしめている部分まで破壊してしまうおそれがありますから。そんなことは竜一さんも本意ではないでしょう」
　そして律子の本意でもない。
「勿論です。たとえ錬金術で生まれた異形の生命だとしても、静香は俺の妹です」
　竜一は語気を強め、律子は肯く。
「錬金術と魔術の両方に精通している者は協会にも稀です。ですから、面倒ではありますが、静香さんの具合が悪くなるたびに協会に連絡して歪みを矯める者を呼んでください」
「伊部さんは、また来てくれないのですか」
「……この次呼ばれるのは私かもしれませんし、そうでないかもしれません。それは協会が決めることですので」
「折角、静香の友達になったのに、それは残念です」
「そうですね。私も、また指名されるよう、一応頼んでおきます」
　律子は社交辞令的な口調でそう答える。我ながらなんて冷酷なのだろうと思った。
　業務期間中、静香とは友人として接してきたつもりだが、彼女に不審がられぬように、無意識に演技をしていたのかもしれない。魔術に携わる者の宿命として、擬似生命の誕生と消滅には何度も立ちあってきた。それ故に、今では割り切って考えるよう努めている。
　律子は、どちらが人間らしからぬ者であるのか、自問自答し、そして自嘲した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4157f/

魔女の毒薬

2010年10月8日15時59分発行